

校長室だより  
NO. 40  
令和元年12月9日

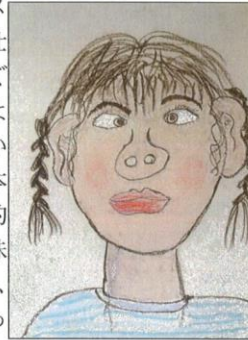
# すべては光る

梅園小学校長  
たか すりょうへい  
高 須 亮 平

## 「働き方改革」とともに「働くイメージ改革」を図る

最近、働き方改革がいろいろなところで叫ばれています。働き方について見直しをしていくことは大切なことです。特に、教員という職業は注目されていて、よくブラック企業のように表現されることがあります。その顕著な例として、勤務時間外の業務に追われることがあるからです。本校の教職員の勤務時間は午前8時10分から午後4時40分です。これは年間を通したものです。しかし、部活動の時間は午後4時40分を超えても行われています。夏場などは1時間以上も超過しています。これは、先生たちの自主的・自発的活動となっています。よく言うサービス残業です。

今回は、そのような「働き方」が内容ではなく、「働くイメージ」について考えたいと思います。それは、子どもたちに仕事をする意味やイメージについて聞いてみると、「お金を稼ぐためにするもの」とか「つらいけど我慢するもの」とかいうような返答をする子が案外多くいるからです。これはどうしてかと考えますと、戦後から高度経済成長期へと、これまでの日本人は働きながら豊かな未来を夢見ていました。しかし、物質的にはほとんどの物を手に入れ、お金を稼ぐこと以外の働く意味を見失ってしまったのではないかと思います。もしかしたら、私たち大人が働くことのよさや素晴らしさを子どもに身をもって教えて来なかったからとも思われます。仕事をただ単にお金を稼ぐことのために行うということはいかがでしょうか。



校長室の絵1 「かお」

たくさんお金が稼げればまた話は変わってくるかもしれないかも？（私はそんな経験をしたことがないので分かりません）ただ、働く喜びと生きる喜びは似た意味にも感じられるので、お金を稼ぐためだけのものでは少し寂しさを感じます。

過日、偶然『涙の数だけ大きくなれる！』（木下晴弘・著、フォレスト出版）を読んではいたら、これこそ働くイメージに関係するものだと思うことが書かれていたので紹介したいと思います。それはスーパーのレジ係の女性の話でした。

その女性は就職をしましたが、なかなか続くことなく、いつも数か月でやめて転職を繰り返していました。理由は、「嫌いな上司がいるから」「自分には合わないから」「想像していた仕事とは違っていたから」等々です。自分の都合のよいような理由を付けていたのです。



校長室の絵2  
「オオサンショウウオ」

ある日、田舎の母親から「もう家へ帰っておいで」と電話がありました。その女性は、そのときはスーパーのレジ打ちの仕事をしていました。母親の言葉に後

押しされて、一人暮らしの部屋の整理をし始めたとき、子どもの頃に書いた日記が出てきました。その日記の中には、「私はピアニストになりたい」と書かれたページがありました。飽きっぽく何をしても長続きしなかった彼女が、習い事で唯一続いたのがピアノだったのでした。希望に燃えて毎日がんばっていた少女時代の「私」が、大人になった今の「私」を叱咤し激励しているかのように、彼女は思えたのでした。そして、彼女は、田舎の母親に電話をして「もう少しここでがんばる」と伝えました。

その女性が心に決めたこと。それはレジ打ちを極めるということでした。当時は今のレジとは違い、品物の金額を手で打ち込むタイプのレジでした。

「私はピアノをやっていた。鍵盤をたたく要領でキーの位置を覚えれば、早く打てるのではないかな」

そんなことを思っただけで実行に移した彼女は、数日もすると、ものすごいスピードでキーを打てるようになっていました。考え方の転換と行動があったのでした。すると、今まで見えなかったものが見え始めてきたのでした。

「この人は、よく高い商品を買う」「この人はいつも閉店間際に来る」等々でした。

ある日、よく来るお婆ちゃんのかごに、5,000円もする尾頭付きの鯛が入っていました。思わず彼女は話しかけました。

「今日は何かいいことがあったんですか」

「そうなの。孫が水泳で賞を取ったんだよ。今日はお祝いをするの」

「おめでとうございます」

この会話をきっかけに、彼女は右手でレジを猛スピードで打ちながら、お客さんと会話をするようになりました。そのとき、彼女は初めて仕事を「楽しい」と思うようになっていました。

ある日のこと、店長の店内放送がスーパーに流れました。

「今日は混み合っています。空いているレジにお回りください」

彼女は、気付いたのでした。5つのレジのうち、自分のレジにだけ行列ができていくことを。店長がお客さんに他のレジに回るように促すと、お客さんは答えました。

「私は買い物だけをしに来ているんじゃないの。あの子と話したくて来るんだから。

ここの列でいいの……」

レジ打ちを極めた彼女は、多くのファンを獲得し、気が付けば彼女にしかできない仕事をしていたのでした。

この話は、しばらく前のものです。最近、AIの進歩により多くの職業が変わりつつあることが話題となっています。レジの仕事はAIに変わって来ると思われますが、彼女とお客さんとのコミュニケーションはAIの入る余地はないように思います。

冒頭で述べた教員という職業もAIに取って変えられるかと言えば、決してそうではなく、これからもずっと続いていく職業です。勤務時間の問題を解消していく中で、きっと今以上のやりがいがあるものになっていくことでしょう。このように、多くの人の働くイメージが変わり、少しでも明るい未来を切り開く力になっていくことを願いたいものです。それには、考え方の転換と行動が必要のようです。



校長室の絵3 「ぼくのくつ」